

資料

いわての伝染病・中毒症をひもとく（その十四）

炭 疽

—炭疽患畜の初体験をふり返って—

岩手県獣医師会岩手支会

金 野 慎一郎

昭和40年（1965年）8月，戦後，日本における第一号炭疽患畜発生となったが，あの発生以来40年を迎えようとしている。

この40年間の経過は，一言では表現できない程の社会変動があり，全国民の健康管理，食の安全安心への意識の高まりは，昭和40年当時とは比較すべくもないように見える。

終戦直後の食料の確保に懸命だった頃から脱して20年を経た昭和40年頃は，生活改善，農業収益の増進のための施策が急速に進展しつつある時代でもあった。

特に，畜産業では，酪農振興が盛んであり県経済連，農協の果たす役割が大きく，岩手郡内の乳用牛の増頭が著しかった。勿論，これに先立って，県の貸付牛事業は，乳用牛，肉用牛に力点がおかれ，全国でも，北海道に次ぐ生産県として，上位確保の諸施策が県の主要課題であった。

このように，岩手の畜産が急速に伸展し始めた直中での炭疽発生だった。

この炭疽発生に係る事件としての経緯は，“岩手の畜産戦後50年の歩み”の編纂のなかで，その真実を明確詳細に記述されてあるので，過去を知る資料として紹介しておきたい。

事件へと発展した当時のマスコミによる全国報道が，連日ビッグニュースとして新聞の一面を賑わしたことは忘れることができない。

勿論，その事件特報となった主因は，炭疽罹患死亡牛を解体，食したことによるものであり，

“死肉の恐怖”，“無知と貧困が招いた惨事”といった県民にとって屈辱的な表現の数々であったが，関係者と共にこれに耐えなければならなかったのである。

当時，死亡牛の一般的な処理は，市町村ごとにへい獣処理場が設置されており，各市町村の許可を得て埋却することが原則であったが，原因不明で急死した場合に届出等が滞る側面が残っていたことも事実である。

東北岩手の食生活を省みれば，飢饉の繰り返し，苦難の食の長い道程があり，これに耐え忍び生き貫くための歴史的な食風土が，この事件に連動したのかも知れない。

1. 事件発生に至る経緯の概要

8月11日の初発例以降8月23日までの間に西根町堀切部落の近隣部落で4頭の発症死亡があり，これを部落民数人で解体，食利用としたため，人体感染という最悪の結果を招いたのである。解体に携った人はまもなく，皮膚異常と腋下リンパ節の腫張等悪寒を伴う風邪様の全身症状を発症したため，近所の病院に通院していた。

8月17日，2頭目の急死牛事例から3食肉業者の解体介入が加わり，問題を大きくしたのであるが，同一地域での死亡牛の続発，人体感染など連続する発症死亡の異常さに気づき，8月24日，4頭目の死亡例が，県への通報事例となったのである。

この日，全県下家保職員が本庁主催の会議

に出席していた。緊急連絡を受けて、病性鑑定職員2名と共に現地に急行し、病性鑑定を行うこととなったのである。

2. 炭疽の診断及び措置

1) 望診所見の概要

急性鼓脹症または死後長時間放置された死体と同様に体表の緊張膨満が著しく、鼻孔、肛門から暗黒色の血液の漏出を認め、死亡時の苦悶が疑われる一般外貌がみられた。

この時点で、血液採取、塗抹鏡検、アスコリー反応等の検査を実施するのが常道であったのだが、炭疽診断の経験がなかった当時のこと。剥皮を先行、続いて開腹の刀を刺入した直後に、脱出した漿膜全般に強い充出血と腸内にガスを充した腸管と共に大人の拳大に腫大した腸管膜リンパ節を直視した時の驚きは、今でもカラー付きの影像として脳裏に鮮明に残っている。

比較的小さな開腹であったが、腹腔内臓器全般の充出血と著しく腫大した脾臓、肩前や胸部皮下の広範な膠様浸潤、体表リンパ節の腫脹などから強く炭疽を疑った。臓器の一部採取後、作業に関係した役場、農協職員と部落民に対し、炭疽が疑われるため、使用した器材等のすべてを死体と共に焼埋却することを指示し、牛乳についても当分の間出荷できない旨を伝えた。

2) 死体の処理

役場と農協職員が主体となり、夜を徹して焼埋却作業に従事したのであるが、これが戦後初の炭疽防疫のスタートとなった。

3) 病鑑職員の調査及び鑑定依頼

病鑑職員による関係医院の立入り調査や本庁への連絡、家畜衛生試験場東北支場への病性鑑定依頼やら一睡もせずに飛び回った。8月25日、血液塗抹標本の鏡検とアスコリー反応陽性によって炭疽と決定され、午前11時、県畜産課にその旨が報告された。

3. 疫学調査の経過と結果

病性決定後、県は直ちに炭疽防疫対策本部を設置し、市町村、農協、関係者の協力を得ながら疫学調査と防疫活動が展開されたが、調査を進める過程で家畜商やら食肉業者の介入などが発覚したため、食肉販売の疑いが出るなど全国民を唖然とさせる事件となったのである。

これらの発生、診断、防疫経過等を整理した岩手の畜産戦後50年の歩みに記載された表1及び表2をそのまま登載させていただき、4についてはその記述を拝借した。

4. 防疫対策の概要

期間や規模に違いはあるが、西根、滝沢地区とも基本的な防疫対策は同様である。ここではその主要な措置をかいつまんで記述する。

- 1) 死体などの処理；所在の明らかな死体や汚染物品の焼却・消毒・埋却を実施。
- 2) 家畜等の移動制限；1市2町1村の特定地域を指定し、牛・馬・豚などの移動を制限。
- 3) 牛乳の廃棄；命令あるいは自主的な生乳の消毒廃棄。廃棄総乳量は8月25日から9月19日までの26日間で約2万8,000kg。
- 4) 緊急予防接種；発生農家の同居牛や濃厚汚染地域の飼養牛に対する免疫血清注射。ならびに周辺家畜に対するワクチン接種。
- 5) 畜舎等の消毒；患畜埋却場所の再三にわたる晒し粉消毒をはじめ、発生部落の全畜舎および隣接地域の畜舎の他、集乳所、道路、車輛など炭疽菌に汚染したとみなされた全てが徹底的に消毒された。また堀切開拓地では、保健所と町による全戸の晒し粉消毒が行なわれ、とくに、台所や食器類の消毒は嚴重をきわめた。

5. 結び

8月11日の急死例に端を発した岩手の炭疽事例は、こうして約3ヵ月後の10月末をもって第1段階を一応終息したのである。

表1 炭疽発生・診断・防疫経過

年月日	西 根 地 区			滝 沢 地 区		
	牛の感染	人間の感染	診断・防疫経過	牛の感染	人間の感染	診断・防疫経過
1965 8.11	A所有の乳牛急死(西1)		* 獣医師埋却指示. * 部落民8名による死亡牛解体. * 死肉の分配.			
8.17		ひふ炭疽 3名. (解体・食肉者)				
8.19		ひふ炭疽 2名. (解体・食肉者)				
8.23	B所有の乳牛急死(西2)	腸炭疽 1名. (食肉幼児)	* 家畜商雇人が死亡牛運搬. 車上放血による汚染拡大.	D所有の乳牛急死(滝1)		* 盛岡の精肉業者による死亡牛解体・運搬・埋却.
8.24	C所有の乳牛急死(西3)	腸炭疽 3名. (食肉幼児)	* 盛岡・玉山家保による現地病性鑑定. * 解体事実判明. * 死体焼・埋却. * 現場の消毒.			
8.25		ひふ炭疽1名および腸炭疽2名. (調理・食肉者)	* 家畜試東北支場による炭疽決定. * 防疫対策本部設置. * 牛乳廃棄の開始. * 発生畜舎の消毒.			
8.26	C所有の乳牛急死(西4)	ひふ炭疽1名および腸炭疽3名(うち乳児2名). (調理・食肉者)	* 移動制限告示. * 死体焼・埋却. * 発生畜舎の消毒.			
8.27			* 濃染地区家畜60頭に免疫血清注射. * 死体埋却場・濃染地区の畜舎消毒.			
8.28 ~ 8.30			* 周辺家畜1,370頭のワクチン接種. * 周辺地域の畜舎消毒と配合飼料回収.			
8.31		感染者累計:16名. 内 訳 ひふ炭疽:7名 腸炭疽:9名			滝1を解体処理した精肉商兄弟4名が, 東北大学付属病院でひふ炭疽と診断.	* 同左病院から県厚生部に通報. * 人体感染経路追求. * 解体事実判明.
9. 1						* 滝1死体の掘り出しと採材. * 岩手大学による炭疽決定. * 防疫対策本部設置. * 牛乳廃棄の開始.
9. 2			* 濃染地区家畜52頭のワクチン接種. (総頭数:1,422頭)			* 移動制限告示. * 発生畜舎等消毒. * 同居家畜53頭に免疫血清注射.
9. 3 ~ 9. 5			* 濃染地区内畜舎の再消毒.			* 周辺家畜2,384頭のワクチン接種. * 精肉商立入先の衛生・消毒指導 * 発生畜舎・埋却場の再消毒.
9.10			* 発生畜舎以外の移動制限解除. * 牛乳廃棄の終了.			* 発生畜舎以外の移動制限解除.
9.14			* 全域移動制限解除			
9.20						* 全域移動制限解除. * 牛乳廃棄の終了.
10.13	C所有の乳牛死亡(西5)		* 現地病性鑑定による炭疽決定. * 死体焼・埋却. * 同居牛の免疫血清注射. * 発生畜舎消毒.			
10.24				D所有の肉牛2頭死亡(滝2・3)		* 西5発生時と同様の防疫措置.

注) 資料: 昭和40年度家畜保健衛生業績発表会集録(岩手県). 家畜衛生30年のあゆみ.

表2 炭疽患畜8頭の主要臨床症状

牛No	発見日時	死亡日時	品種	性	年齢	主要臨床症状	発生農場
西1	8月11日 13時00分	8月11日 14時00分	ホルスタイン	♀	3歳	食欲減退・起立困難・後駆踳跟 呼吸促迫・心悸亢進・T:39.2	西根町 A 堀切
〳2	8月23日 20時00分	8月23日 22時30分	ジャージー	♀	4歳	食欲不振・起立不能・呼吸促迫 結膜充血・蠕動停止・ラッセル 倦怠症状・T:38.2・P:120	西根町 B 堀切
〳3	8月23日 22時00分	8月24日 1時00分	ホルスタイン	♀	8歳	食欲不振・後駆踳跟・呼吸促迫 倦怠嗜眠・T:40.2・P:115	岩手町 C 浮島
〳4	8月26日 5時00分	(推)8月26日 (推)2時00分	ジャージー	♀	4歳	夜の給飼時には異状なく、翌朝 死亡を発見.	岩手町 C 浮島
〳5	10月12日 18時00分	10月13日 10時10分	ホルスタイン	♀	4歳	食欲減退～廃絶・後駆踳跟・呼 吸促迫・結膜充血・腹困膨満・ 粘血便・T:39.1・P:90	岩手町 C 浮島
滝1	8月23日 12時30分	8月23日 16時00分	ジャージー	♀	13歳	食欲減退・軟便	滝沢村 D 耳取
〳2	10月24日 18時00分	10月24日 20時30分	褐毛和種	♂	3歳	可視粘膜充血・外陰部重度充血 粘液様鼻汁.8.22:ワクチン接種	滝沢村 D 耳取
〳3	10月24日 18時30分	10月24日 23時20分	褐毛和種	♂	4歳	粘膜充血・皮温不正・皮下浮腫 後駆踳跟・呼吸促迫・心悸亢進 知覚鈍麻・T:38.9・P:110	滝沢村 D 耳取

注) 表中(推)は推定死亡日時. 資料: 昭和40年度家畜保健衛生業績発表会集録(岩手県)

この間の防疫活動を振り返ってみると、役場職員の大半と農協職員の方々は、懸命に、協力的に防疫活動に携わり、本来業務はほとんど停止状態となる程の全員体制が続いたのである。また、発生と同時に、炭疽発生農家を中心とした臨床検査、異常牛のチェックのため、堀切部落の巡回を1日3回、体温測定と治療に、専属勤務同様の対応をしたことが思い出される。その一端を述べれば、患畜発生農家の牛舎では時として、朝に平熱だった牛が、夕刻には41℃あるいは42℃の高熱を発生し、呼吸促迫、心悸亢進、結膜充血、不安症状を伴う後肢の不安定動作など炭疽感染を疑わせる諸症状を発生していた。当該牛に対する処置は、ペニシリン1,200万単位の筋注と免疫血清の同時注射を繰り返し、正常体温への回復とその確認など夜半まで継続観察する事例が10数頭に上った。

県畜産課からは直々に、“これ以上患畜を出すな”の強い指示があり、まさしく背水の陣、一生懸命だったことが記憶に残っている。このため、県庁から左ハンドルのジープを特別配車していただき、診療業務に明け暮れた

3ヵ月間でもあった。

また、この昭和40年は、炭疽以外のクロストリジウム属菌感染によるとみられる死亡例が多発した年でもあり、急死例に対する血液塗抹検査とアスコリー反応検査をその都度行ったものである。当時、私も30歳、疲れを知らない時代でもあったのである。

さて、堀切の炭疽は地域住民の初体験ということもあって、初発牛の死体処理の不手際が炭疽菌の拡散による続発や人体感染を招き、また初発から13日後の3頭目の発生に至りようやく家保への届け出がなされたため初動防疫が立ち遅れたこと、そして精肉販売業者が死体の解体に従事し自身も感染発症するなど、社会不安をもたらした事件として、長く人々の記憶に留められたのであった。

なお、初発地の近隣で翌年及び4年後に、岩手町の発生農家で5年後に、各乳牛1頭の発生へと繋がり、そのどれもが初発例の解体による環境汚染に源を発生するとはいえ、常在化しやすい本病の特性をいやという程見せつけられたのである。